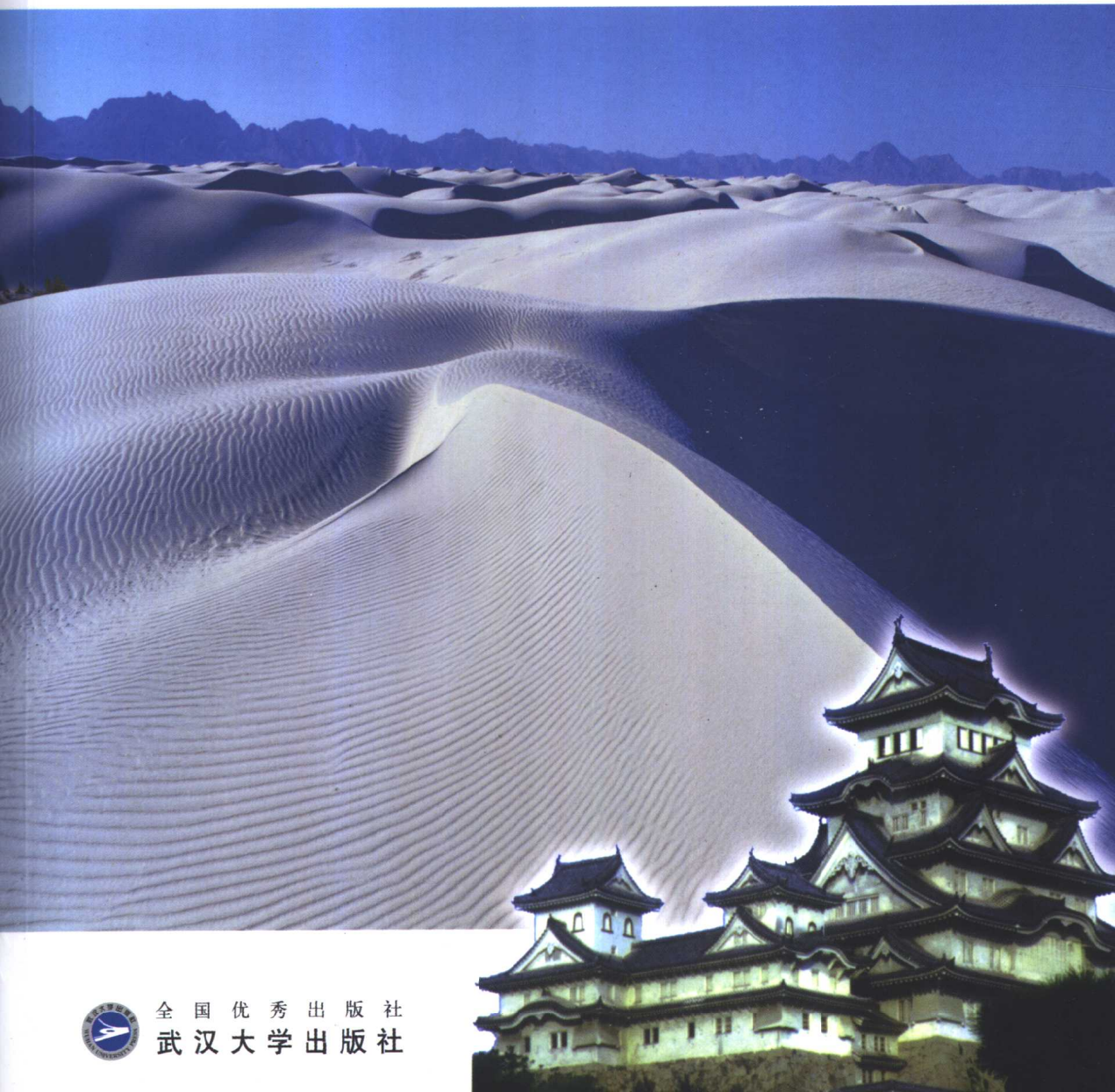
—日本语中·高级学生教材

日本语

王宣琦 编著

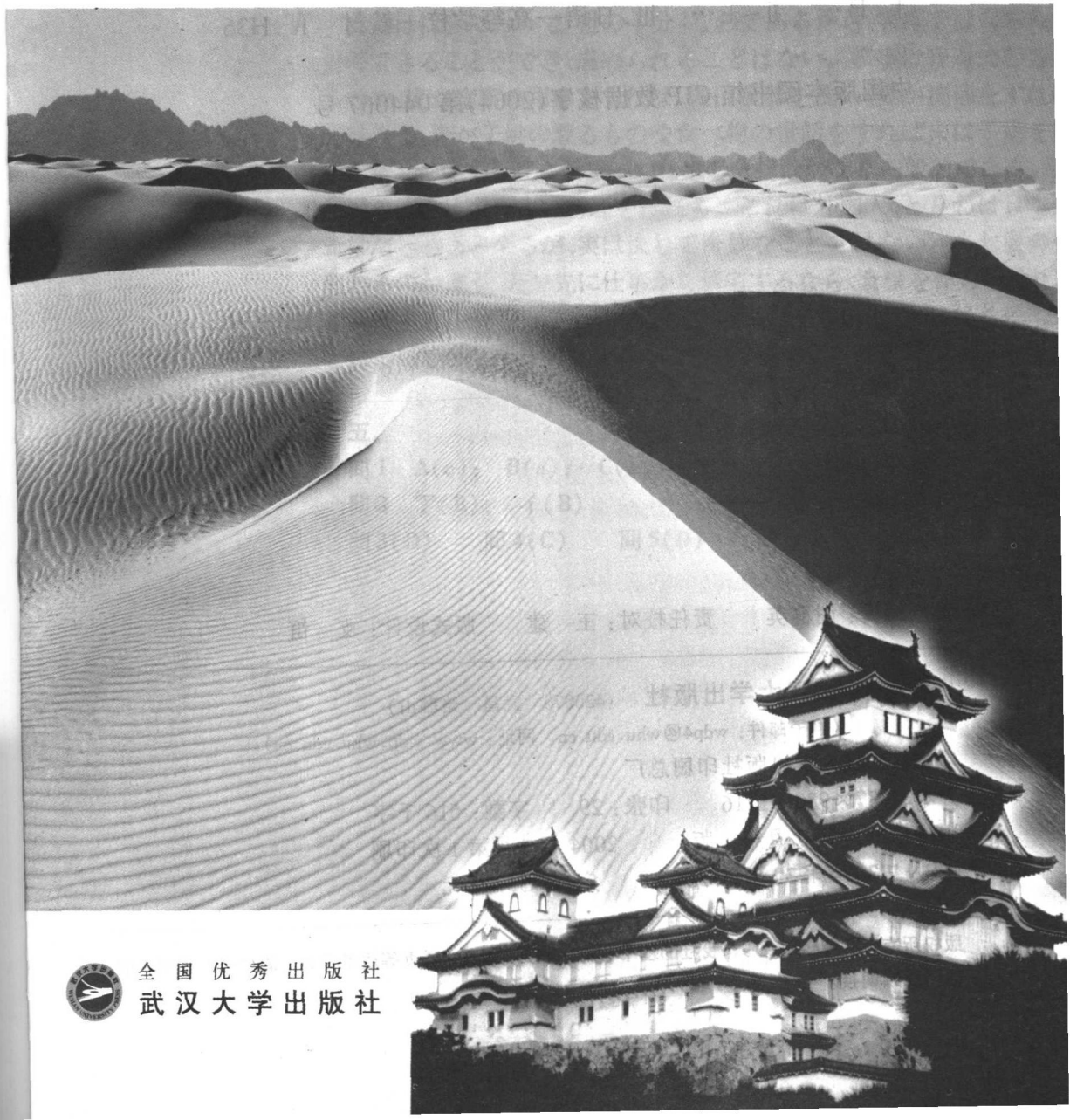


全国优秀出版社
武汉大学出版社

—日本语中·高级学生教材

日本语

王宣琦＼编著



全国优秀出版社
武汉大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

日本语/王宣琦编著.—武汉：武汉大学出版社,2004.7
日本语中·高级学生教材
ISBN 7-307-04239-8

Ⅰ.日… Ⅱ.王… Ⅲ.日语—高等学校—教材 Ⅳ.H36

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2004)第 044067 号

责任编辑：谢群英　　责任校对：王　建　　版式设计：支　笛

出版发行：**武汉大学出版社**　(430072　武昌　珞珈山)
(电子邮件：wdp4@whu.edu.cn　网址：www.wdp.whu.edu.cn)
印刷：武汉大学出版社印刷总厂
开本：787×980　1/16　　印张：29　　字数：516 千字
版次：2004 年 7 月第 1 版　　2004 年 7 月第 1 次印刷
ISBN 7-307-04239-8/H·347　　定价：32.00 元

版权所有，不得翻印；凡购我社的图书，如有缺页、倒页、脱页等质量问题，请与当地图书销售部门联系调换。

内容提要

这是一本即有欣赏阅读价值，又能提高日语语言能力的教科书。全书采用了全新的日语文字资料，对学习中常见的文法、词汇进行了详尽的解释，并列举了丰富而又生动的例句。每课练习内容丰实，配有参考答案可供核查，定能帮助学生在日语等级考试和考研中获益。毫不夸张地说，这是一本集实用性，趣味性和知识性为一体的全新教材。它一定能成为中高级日语学习者的良师益友。

前　言

随着中日两国交流的持续发展，日语学习的热潮在国内还在蓬勃发展，且大有不断升温之势。根据国内学习日语的需要，近年各地陆续出版了一大批学习用书。然而遗憾的是中·高级日语教材却极为少见。此次出版的日语中·高级学生教材《日本语》，是武汉大学"十五"规划重点教材项目之一。它的出版为广大日语学习者提供了一本全新的学习用书。

本教材编排有18课，即可供日语专业高年级学生使用，又适合有志于提高日语水平的非专业学习者使用。全书课文选材新颖，涉及面广，每篇文章都具有极强的可读性。可以使学生在学习日语的同时，更多地了解日本的社会文化和人文背景，加深对日本的了解。编者根据多年的教学经验，对语言学习中必不可少的惯用句型、词汇进行了独到的解释，特别是对日语中常见的类意表达进行了一定的比较，可以帮助学习者更深入地理解运用。全书每课在对日语词汇、句型、惯用句进行解释的同时，还列举了大量生动实用的例句。可以说，这些例句是本书的特色，也是编者倾注了极大心血的部分。

众所周知，外语的学习离不开长久的训练。基于这一特点，本教材每课课后都安排了相当分量的练习习题。大量的习题可与日语能力考试的一二级试题挂钩，学习者在完成这些习题之后，无疑会极大地提高日语实用能力。同时，练习部分还使用了各种不同形式的题型，如改错、惯用句选择、拟声拟态词选择、汉译日等，这些练习不仅能使学生全面地提高日语的功力，而且能作为日语能力考试，研究生入学考试的重要练习手段。我们期望读者在学完本教材后，自己的日语水平有一个质的提高。

本教材的选题、注释、语法及词汇解释、例句的编写、练习题的选用等由编著者担任，词汇注释和部分练习题的解答则由于锦华、熊伟渡同志承担。在此感谢她们的辛勤劳动。

本书的出版得到了武汉大学教务部的大力支持与资助，同时也得到了武汉大学外语学院、日语系同仁们的关怀和帮助，作者对此表示由衷的感激。武汉大学出版社为此书的出版给予了全力的帮助，特别是担任本书编辑的谢群英副编审更是提出了许多宝贵的意见，并为此书付出了大量的精力，作者在此

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

表示诚挚的谢意。

本教材在编写过程中，参考了许多词典、教材、专著及报刊等，并引用了部分内容。课文所用文章已注明了出处，并对作者作了介绍，其他参考资料则列入参考书目里，特此说明。在此谨向我所参考的书籍的作者、出版社表示衷心的感谢。

由于写作时间仓促，加之编者水平有限，谬误之处在所难免，恳切期待有关专家及广大读者提出宝贵意见。

编著者

2004 年 3 月于珞珈山麓

目　次

第一課　日本人の美意識…… 1
第二課　ゴミ——マナーのバロメーター …… 27
第三課　大学は現代日本の縮図 …… 49
第四課　天声人語(４編) …… 75
第五課　花嫁は16歳! …… 97
第六課　フリーター世代…… 123
第七課　日米中は「三国志」ではなく「三辺的」
　　に考える関係を目指すべき…… 147
第八課　結構きますよ…… 168
第九課　小泉改革のジレンマ…… 192
第十課　大阪学…… 217
第十一課　日本サッカーは世界に通じるのか…… 245
第十二課　「お受験」は役に立つか …… 267
第十三課　現代の詩四編…… 289
第十四課　「東京」と「故郷」に揺れる日本人 …… 307
第十五課　文化論の落とし穴…… 329
第十六課　幸福の条件(二題) …… 348
第十七課　不機嫌な果実…… 370
第十八課　不機嫌な果実(続) …… 400

練習問題の参考解答案…… 433
参考資料…… 456

第一課　日本人の美意識

たかしなしゅうじ
高階秀爾

一

大野晋氏の「日本語の年輪」によると、日本語の「美しい」という言葉が、今日我々が使っているような意味を持つようになったのは、おおむね室町時代以降のことであるという。

もちろん、それ以前にも、「うつくしい」という言葉はあった。しかしそれは、奈良時代では、例えば山上憶良が

「妻子見ればめぐし美し」。

と歌った例に見られるように、親しい人に対する愛情を表す言葉であり、或いは平安時代では、例えば「竹取物語」の中で竹取の翁がかぐや姫を竹の中で見つけ出した時、

「三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり」。

と表現しているように、小さな者に対する愛情、つまり「かれんだ」とか「かわいい」というほどの意味であったという。

それでは、今日我々が普通に使う意味での「美しい」にあたる言葉は、奈良時代や平安時代では何であったろうと、大野氏は、それは「くはし」「きよし」「さやけし」というような言葉であったろうと述べておられる。このうち「くわし」は、今日の「詳しい」からも明らかなように、「こまかい」に通ずるような、部分的なものへの関心の強さを物語る言葉である。それに対し、「きよし」「やさけし」は、現在でも時にそう使われるように、もともと「汚れのない」「純粋無垢」ということで、つまり上代の人々は、混じりっけのない、不純なもののない状態を示す言葉で「美しい」という意味を伝えていたわけである。

金田一春彦氏も、「ことばの博物誌」のなかで、

山吹の清げに、藤のおぼつかなきさましたる、すべて、おもひ捨てがたきこと多し。

という「徒然草」の一節を引きながら、この場合の「清げに」は、今日の「清らかに」という言葉よりも、むしろ「美しく」にあたる意味だと説明しておられる。

「源氏物語」の中の「清らなる玉のをのこみこさへ生まれたまひぬ。」の「清ら」も、同じような意味を表すものであろう。

このようなことは、おそらく国文学においては極めて初歩的な常識であろうが、日本人の美意識を考えるうえでは、極めて重要なことのように思われる。というのは、それによって、我々の祖先たちがどのようなものに「美」を見出していたか、何を「美しい」と感じていたかが明らかにされるからである。そして、多少意味が違ってきたとはいえ、上代の言葉が今日でもなお生き続けているように、その我々の祖先たちの感覚は今の我々の中にもなんらかの形で生き続けているにちがいないからである。では、このような言葉を通してうかがわれる我々日本人のその美意識というのは、いったいどのようなものであったろうか。

さしあたり私は、ここでは、日本人の美意識を探るうえでの手がかりとして、「うつくし」という言葉と、「きよし」という言葉に注目したい。既に見たように、「うつくし」はかつてはある特殊な限定された対象に対する愛情表現を意味したが今日では美的性質一般を表す言葉であり、「きよし」のほうは、逆に、かつては「美しいもの」一般に用いられたが、今日では主として汚れのないものに対して使用される。ここに、日本の美意識の大きな特色があるといってよいのである。

二

「うつくしい」という言葉が、上代においては親しい人への愛情や、小さいもの、かれんなものに対する愛情を表す言葉であり、しかもそれが、やがて時と共に美的性質一般を意味するものに昇格していったという事実は、日本人の美意識が、主として自分より小さいもの、弱いもの、保護してやらなければならないようなものに向けられていたことを物語っている。このことは、西欧における美意識の根幹であるギリシアにおいて、美が何よりも力と結び付いていたことを考えてみると、極めて特徴的と言ってよい。

事実、ギリシア人たちにとっては、美は真や善と同じように理想化された

価値であり、人間よりも上位の存在である神に属するものであった。したがってそれは当然、他の理想化された価値である善や力や知恵などと結び付く。もっとも、ギリシアの神々は、人間から全く切り離されたものではなく、むしろ人間の中の望ましい能力や価値を最高度に備えた存在として考えられていたから、人間の中でも特に衆に抜きんでた能力の持ち主は、それだけ神に近い存在として人々の尊敬を集め、神々たちの特性を——程度は少し落ちるとしても——分有していると考えられていた。つまり端的に言えば、力の世界はそのままの世界につながっていたのである。ギリシアの彫像のうち、男性をモティーフとしたもののほとんどが、神々か英雄でなければ、オリンピック競技の優勝者のようなスポーツ選手の像であったということは、この間の事情をよく物語るものであろう。

ところが、日本人は、力強いものよりも、むしろ弱い、小さいものに対して強く美的感情を刺激させられた。「枕草子」の中で雀の子の遊ぶさまを「うつくし」と形容しているが、そのような小さな生物や「三寸ばかりなる」かぐや姫のような存在が、ことのほか「うつくしい」ものと思われたのである。もちろん、この場合の「うつくし」は、まだ現在の「美しい」というほど一般的な意味になってはいないで、もっと情緒的な意味合いが強いが、ほかならぬその弱い、小さいものに対する愛情表現の言葉が、やがて一般的な「美」を表すものとして定着していく過程に、西欧の美意識とは違った我々の感受性をはっきりと認めることができる。いや、西欧とまでは言わずとも漢字の「美」が文字どおり「羊」の「大きい」さまを形容する会意文字であることを思い出せば、お隣の中国と比べても、そこにずいぶん大きな差異があると言わねばならない。(ついでに言えば、「綺麗」の「麗」の字は、「鹿」の角の大きく堂々としているさまを表した文字だという)。箱庭とか、盆栽のような独特の芸術を発展させた日本人の美意識は、既に上代の「うつくし」の中に潜んでいたのである。

箱庭のような特殊なものを持ち出さずとも、わずか数坪の広さの中に深山幽谷の趣を現前せしめようとする日本の造園術を考えてみても、「縮小された世界」に対する日本人の好みは明らかであると言える。本物の鎧兜そっくりに作った五月人形をはじめ、日本の人形の精巧さはしばしば外国人の驚嘆の的になるが、そのような人形を愛好した我々の祖先たちは、そこに、人形師たちの優れた技巧の冴えを見て感心したと同時に、大きな美的喜びを味わっていたに相違ないのである。

このことは、工芸の世界において特に顕著であるが、絵画の世界において

もはっきりとうかがうことができる。近世初期に数多く作られた洛中洛外図や風俗図屏風など、文字どおり「縮小された世界」であって、そこでは、かぐや姫よりももっと小さい登場人物たちが、多彩なエピソードを展開して見せてくれるのである。

日本の絵画は、西欧の絵画と比べて、極めて平面的、装飾的であって、統一された空間構成がないということがしばしば言われる。それは確かにそのとおりと言ってよいが、そのような絵画表現上の特色も、実はこの「小さいもの」に喜びを見出す日本人の美意識と無関係ではない。

事実、洛中洛外図や風俗図において重要なのは、全体の構成よりもむしろ細部の綿密な描写である。洛中洛外図というのは、普通、まるで雲の上から見下ろしでもしたような俯瞰構図で描かれる。しかし、この俯瞰構図はいわば舞台装置であって、その舞台装置の中で繰り広げられるさまざまの情景は、必ずしも雲の上から見下ろしたように描かれているわけではない。それどころか、町角の猿回しや、お祭りの山車や、大道商人の姿など、いずれもまるですぐそばで見ているように綿密に細かく描き出されている。或いは、風俗図に登場する女たちは、着物の柄模様まではっきりと見分けられるように描かれている。もし本当に雲の上か、どこか遠くから眺めたとすれば、むろんあれほどまで細かい部分が見えるはずはない。つまりそれは、遠くから眺められた世界というよりも、あくまでも「縮小された世界」なのである。

画面のあらゆる細部において、このような綿密な描写を繰り返していけば、西欧的な意味での「統一のある空間構成」が生まれてこないことは当然である。西欧的な「統一のある空間構成」というのは、ルネッサンス時代に完成された遠近法の表現に典型的に見られるように、ある一定の視点――つまりそれは画家その人の視点にほかならないのだが――から見られた視覚世界像のことだからである。

遠近法の理論の細かいことには、今ここで詳しく触れる余裕はないが、画面における形体の大小、色彩の濃淡が、現実の空間における距離の遠近に対応するというのがその根本的な考え方であることは言うまでもない。つまり、簡単に言えば、遠くのものは小さく見え、近くのものは大きく見えるということであり、また近くのものは色彩が鮮明で、遠くのものは色がかすんで見えるということである。逆に言えば、画面に人物が小さく描かれていれば、それは(その人物が一寸法師だということではなくて)画家から遠い距離にいるということを示すものであり、またその人物の衣装が不鮮明な

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

色で描かれていたとしても、それは(その衣装が薄汚れているということを示すものではなく)やはり画家との距離を表すものなのである。このようにして、画面のそれぞれの対象や人物に適切な距離が設定され、その結果一つのまとまった「空間構成」が成立するわけである。

だが、このような意味での「空間構成」が成立するためには、画家の視点が一定不動のものであるという前提条件が必要である。いうまでもなく距離の「遠近」というのは相対的なものであって、画家の視点が移動すれば遠近の関係も当然変わってくる。西欧的な「空間構成」を画面に作り出すためには、画面のあらゆる部分がただ一つの視点が違っては、統一的な空間は表現できないのである。

ところが、洛中洛外図のような作品では、そのような一定不動の視点などはない。町全体は高い雲の上から見下ろされているが、個々の情景はそれぞれその場に立ち会っているように綿密に描き出される。画面右手の猿回しの情景を見ている時と、画面左手の祭礼の行列を描く時の画家の視点は同じものではない。とすれば、画面にお互いの情景の間の立体的な距離関係が表現されようがない。強いて言えば、それぞれの場面、それぞれの人物は、着物の柄まではっきり見えるほどの至近距離から描かれているのであって、全体はそのような個々の情景・人物の集積にほかならないのである。

したがって、日本の絵画表現は写実的でないということも、全体の空間構成を考えた時にのみはじめて言い得ることである。確かに、一定の視点から眺めた視覚世界という意味での写実的な表現はそこにはない。しかしその代わり、細部の観察は(江戸小紋の細かい模様まではっきりと描写するぐらい)、綿密であり、応挙や北斎の写生帖に見られるように、西欧の優れた芸術家に劣らないほど「写実的」なのである。

このことは、例えば極めて日本的な絵画形式である平安、鎌倉の絵巻物についても同様である。もともと絵巻物は、部分を次々に観賞していくものであって、あれを全体一度に眺めようとする人はいない。いわばそれも、全体の統一的な構図を欠いた部分の寄せ集めである。それはちょうど、日本の「物語」が、首尾一貫したプロットを展開するというよりも、さまざまのエピソードの寄せ集めであるのと対応する。まして、「徒然草」や「枕草子」のような随筆文学や、日記文学が様々の見聞・感想の寄せ集めであることは言うまでもない。日本人は全体の構成よりも、このような細かな部分の寄せ集めをことのほか好んだようである。細部への関心を示す「くわし」という言葉が、上代においては「美しい」という意味に使われていたという

大野氏の指摘もこのことを裏書きするものと言ってよいであろう。

三

絵巻物にしても、洛中洛外図のような装飾画にしても、画面を次々にさまざまな部分で埋めていくから、当然全体は「装飾的」なものとなる。それに対して、日本人の美意識の中には、もう一つ別の流れがある。本論の冒頭で触れた「きよし」という言葉に対応するものがそれである。

一般に西欧人が日本の美術の特色を指摘する時には、大和絵や、琳派や、或いは工芸品に見られる華やかな「装飾性」と、水墨画や茶室の建築などに見られるいわゆる「わび」「さび」の世界を挙げるのが普通である。最近欧米で流行している「わび」「さび」への憧れが、どの程度正確な理解に基づいているものであるかは別問題として、日本の美術の中に「貧しさの美学」とでも呼ぶべきものがあることは確かである。そしてそれは、美しいものを「きよし」「きよらか」と呼んだ上代の日本人の感受性と深く結び付いている。

「きよし」というのは、既に見たように、「汚れのない」状態である。つまり、なにかよいものがあるのではなくて、悪いもの、うとましいものがないという状態である。それはいわば「否定の美」と言ってもよい。多彩な色彩を拒否して墨一色にすべてをかけた水墨画や、派手な装置や動きを極度に抑制した能に逆に豊かな「美」を見出す感受性は、正しく美しいものを受け継いでいる。画面の何も描かれていない「余白」の部分を重要視する美学や、或いは、秀吉が朝顔の花を見たいと言ってやって来た時、庭の朝顔を全部捨てさせて、ただ一輪の花を床の間に飾って迎えたという利休の有名なエピソードに見られる美の考え方なども、同じような「否定の美学」に属するものと言ってよい。

このような「否定の美学」も、西欧の美意識と比較してみると、極めて日本的なものということができる。先に私は、ギリシアにおいては美は力と結び付いていたと述べたが、それと同時に、美はまた富や豊かさとも結び付いていた。ギリシア神話の中の有名なパリスの審判のエピソードでは、アフロティテ、アテーネ、ヘラの三人の女神が「美しさ」を競い合うが、このうちアフロティテは愛と美の女神であるから当然として、アテーネは力と知恵の女神であり、ヘラは富と権力の女神である。つまり、ギリシアにおいては、力や富は、極めて自然に美と一つになっていた。そのような伝統の中で

生きてきた西欧人たちが「貧しさ」の中に美を見出す日本人の美学に大きな驚きと啓示を見出したとしても、少しも不思議ではない(断るまでもないことだが、フランス人などが好んで使う「貧しさの美学」という時の「貧しさ」は、経済的な意味ではない。余計なものの排除、抑制、厳しさというような意味である)。

日本人が滅びゆくもの、移ろいやすいもの、消え去りやすいもの束の間のものにことのほか鋭敏に「美」を感じるのも、おそらくこの「きよらか」なものに美を見出す感受性と無縁ではないだろう。失われゆくものは常に美しい。それが最も徹底した形で表れる時、それは「死」を美化するという形をとる。言うまでもなく、「死」はあらゆる物の否定だからである。近松の心中物語から山男の遭難に至るまで、日本ほど「死」が美化されている所はほかにない。

当然のことながら、このような「きよらか」なものに憧れる美意識は、美術ないしは芸術の領域にだけとどまるものではなく、人間の生活行動全般にまで及んでいる。一般に日本では、有能な「やり手」よりも、無能でも「清潔な人」のほうが好まれる。つまり、行動の基準としての倫理観が著しく美的なものと結び付いているのである。逆に言えば、我々の行動は、我々の美意識によって強く規定されているのである。明治以来、いやもう少し溯って十八世紀以来、日本は西欧の文化に接することによって確かに大きく変わったが、しかしそれにもかかわらず、美しいものに対する上代人たちの感受性は、今もなお生き続けているように思われる。近代以降の芸術家たちの中に「うつくし」と「きよし」の伝統の流れを見出すことは、決して困難なことではないだろう。おそらくそれなればこそ、我々はもう一度我々の祖先たちの美意識がどのようなものであったかを考え直してみる必要があるのである。

1997年版尚学図書「新選 国語二」による

作者紹介 高階秀爾 1932年(昭和七年)~、美術史家・評論家。東京都生まれ。主な著作に「世紀末芸術」、「ピカソ・剽窃の論理」、「ルネッサンスの光と闇」、「美の回廊」、翻訳「ルオー」(ドリヴァル)、「芸術と狂気」(ウィント)などがある。

注釈

1. 大野晋(おおのすすむ) (1919年~)、国語学者。「日本語の年輪」は1961年刊。

2. 山上憶良（やまのうえおくら）　(660?　~732?) 奈良時代の歌人「妻子（めこ）見れば…」は、「万葉集」巻五の一節。
3. めぐし:かわいい。いとしい。
4. 竹取物語　現存する日本最古の物語。平安時代の前期に成立する。作者未詳。「三寸（さんすん）ばかりなる人、…」は、冒頭部分の一節。
5. 三寸　約9センチメートル。
6. 金田一春彦　(1913 ~) 国語学者。「言葉の博物誌」1966 年刊。
7. 徒然草（つれづれぐさ）　随筆集。鎌倉（かまくら）時代の終わりから室町（むろまち）時代の初めにかけての成立。作者は吉田兼好。
8. 会意文字（かいい）　二つ以上の文字を意味の上から組み合わせて作られた漢字。「日」と「月」で「明」、「人」と「木」で「休」を作る類。
9. 洛中洛外図　京都市中とその郊外の名所や生活風俗を描いた絵画。
10. 風俗図屏風（びょうぶ）　年中行事や行楽などの生活風俗を描いた屏風。
11. ルネッサンス　14 世紀から16 世紀にかけて、イタリアから全ヨーロッパに波及した芸術及び思想上の革新運動。
12. 江戸小紋（こもん）　星・小花など細かい模様を型紙によって染め出した布地（ぬのじ）。
13. 応挙　丸山応挙（まるやまおうきょ）(1737 ~ 1795)。江戸時代中期の画家。
14. 北斎　葛飾北斎（かつしかほくさい）(1760 ~ 1849)。江戸時代後期の浮世絵師。
15. 大和絵　日本的な題材・画風・技法によって描かれた絵画。中国の風景などを描いた唐絵と区別して言う呼称で、平安時代に始まる。
16. 琳派　江戸時代の装飾芸術の流派の一つ。俵屋宗達（たわらやそうたつ）(生没年未詳) を祖として、尾形光琳（おかたこうりん）(1658 ~ 1716) によって大成された。
17. 秀吉　豊臣秀吉（とよとみひでよし）(1536 ~ 1598)。安土桃山（あづちももやま）時代の武将。
18. 利休　千利休（せんのりきゅう）(1522 ~ 1591)。安土桃山時代の茶人。
19. パリス　ギリシア神話中のトロイアの王子。アフロディテ・アテーネ・ヘラという三人の女神の美貌争いの審判をした。
20. 近松　近松門左衛門（ちかまつもんざえもん）(1653 ~ 1724)。江戸時代中期の浄瑠璃・歌舞伎脚本作者。主な作品に「曽根崎（そねざき）心中」、「女殺し油の地獄」などがある。
21. 心中物　男女の情死を主題とした浄瑠璃・歌舞伎作品。

新出単語

おおむね[名、副]	大体。あらまし。/大概。大致。
可憐(かれん)[形ダ]	いじらしく、かわいらしさま。/可爱。
純粋(じゅんすい)[名、形ダ]	①ほかもものが何も交じっていないさま。/纯粹。 ②邪念や私欲が全くなく、ひたむきであるさま。/纯真。单纯。
	無垢(むく)[名、形ダ] ①煩悩のないこと。/没有烦恼。 ②清らかでけがれのないこと。/纯洁。洁白。 ③混ざり気がなく純粋であること。纯粹。 ④布地が全部無地で同色であること。多く、白無垢に言う。/纯一色。多指白色。
混じりっ気[名]	他のものが混じっていること。/夹杂(物)。
おぼつかない[形]	①心細く頼りない。/没把握。靠不住。 ②疑わしい。不確かである。/可疑。不确定。
昇格(しょうかく)[名・自他サ]	格式、資格、地位などが上がること。また、上げること。/升格。提升。
根幹(こんかん)[名]	根と幹。物事の大もと。根本。中。枢。/根和干。根本。中枢。关键。
望ましい[形]	そうあってほしい。/希望能…
抜きん出る[自一]	ひときわ高く出ている。転じて、きわ立って秀でる。人なみはずれて優れる。/高出。出众。超群。
分有[名・他サ]	あるものを幾つかに分けて所有すること。/分有。分得。
端的に[形ダ]	①明白であるさま。/明显的。 ②てっとりばやく急所をつくさま。/直截了当。
彫像[名]	彫刻して像を作ること。また、彫刻した像。/雕刻。雕像。
アティーフ[名]	アチーフメントテキスト(achievement test)の略。学習で得られた結果を測るための検査。学力検査。/水平考试。

物語る[他五]	①ある事について語る。/讲述。 ②ある事実がそのままある意味をはっきりと示す。/说明。表明。
ことのほか[副]	思いのほか。案外。意外に。/意外。格外。
情緒(じょうちょ)[名]	①そのものに接した時に受ける、しみじみとした特有の情趣、雰囲気。/情趣。氛围。②情動。/情绪。
差異(さい)[名]	他のものと異なる点。違い。/差异。差别。
箱庭(はこにわ)[名]	浅い箱の中に土を入れ、小さな木や草を植え、庭園・山水の景をかたどったもの。/山水式或庭园式盆景。
深山幽谷(しんざんゆうこく)[名]	奥深い山。みやま。山深いところにある静かな谷。/深山幽谷。
趣(おもむき)[名]	①事柄の内容の大体の方向。また、事柄の大事な内容。趣意。趣旨。/意思。内容。 ②物事の成り行き。様子。事情。/样子。景象。情况。 ③おもしろみ。味わい。情趣。風情。/风趣。趣味。情趣。风格。
現前(げんぜん)[名・自サ]	目の前にあること。目前に現れること。/眼前。目前。
鎧兜(よろいかぶと)[名]	鎧は昔戦場で着用した身体を被護した武具。兜は頭部を防御する鉄製の武具。/盔甲。
五月人形(さつきにんぎょう)[名]	五月五日に甲冑や刀、槍などの武具を飾って、男の子に武運長久や立身出世を願う飾り人形。/5月5日给男孩子的武士玩偶。
的(まと)[名]	①弓,鉄砲などの発射練習をするとき、目標とするもの。/靶子。②めあて。目標。/目标。对象。
冴える(さえる)[自一]	①澄みきること。光・色・寒気などがすんで透ること。/(光、色)鲜明。清晰。 ②技などのあざやかさ。また、頭の働きや感覚の鋭さ。/精巧。高明。机敏。
顕著(けんちょ)[形ダ]	際立って目に付くさま。著しいさま。/显著。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com